

## 西アフリカ，マリの美術教育から得られる日本への示唆

IPU 環太平洋大学 次世代教育学部 子ども発達学科 准教授 後藤 由佳



### 1. はじめに

これまでアフリカの彫刻は、近代西欧の芸術家たちによって生命力に満ちあふれた独自の造形表現を見出され、例えばピカソ(1881～1973 スペイン)やマティス(1869～1954 フランス)は、これを「自由な造形」と批評してきた。

筆者は、今世紀初頭の2001年度に約8カ月間、西アフリカのマリ共和国に滞在し、当時唯一の芸術のための学校であったマリの国立芸術高等専門学校(Institut National des Art, 以下 I.N.A)で彫刻を学んだ。参与観察調査及び制作実践は、マリの首都バマコを中心に、2001年8月上旬～2002年3月下旬、および2002年9月の二度にわたって実施した(写真1)。その後、芸術、保育・幼児教育の分野を中心に、マリで制作、視察・調査を行ってきた。そこで本稿では、西アフリカのマリ共和国に着目し、国立芸術高等専門学校の彫刻制作の実践例から、アフリカ仏語圏諸国の美術教育の内容と特徴を具体的な事例として検討する。

### 2. 義務教育

美術教育の特徴を検討するために、まず、I.N.A入学以前の小・中学校での造形美術活動について把握し、義務教育における芸術教育の特徴を明らかにしたい。

筆者は、首都バマコの公立小・中学校(Ecole Fondamentale de Sogoniko B, Ecole Fondamentale de Sogoniko Groupe1)において、教育指導方法に関する参与観察調査を行った。そこでの教育指導は暗記型教育であり、思考能力や推理能力よりも暗記力を鍛えることに、重点が置かれていた。具体的には、教員の仕事は既成の知識・技術の一方向的な伝達であり、児童や生徒の学習活動も、それに関連する知識・技術の習得となっている。2002年の授業科目一覧によると、小・中学校において、授業に

「絵画」(Dessin)があるものの、時間数は小学校 5~6 年生で 1 週間に 1 時間に限られている。同様に、中学校においては、家庭科、音楽、絵画の 3 科目の中から 1 科目選択の上、時間数は 1 週間に 1 時間のみである。また、教員不足などの理由で、実質的には芸術教育は行われていないに等しかった。

### 3. 国立芸術高等専門学校

I.N.A は首都バマコにあり、造形美術をはじめ、芸術分野での専門的職業人に求められる専門性の基礎・基本に重点を置いた職業教育を行い、幅広い芸術分野での人材を養成し、マリの産業・社会の発展を支える高等専門学校である。四年制の男女共学で、6 学科 16 専攻に区分されている。専門分野に関する基礎的・基本的な知識・技能を身に付けるとともに、社会の様々な情勢の変化への対応力を高めることを重視した教育が行われている。こうした知識・技能、実践力、対応力等を身に付けることは、高等教育機関において更に高度な職業教育を受けていくための基盤にもなる。

一般教養科目には、フランス語や英語そして幾何学等がある。学科は、アニメーション科、演劇科、音楽科、造形芸術科、工芸科、学術研究科の 6 学科を設置、そして工芸科は、彫刻専攻、木工芸専攻、金属工芸専攻、織り工芸専攻、彫金専攻、皮革工芸専攻の 6 専攻に区分している。マリの公立教育機関の場合、授業料は全て無償であり、I.N.A においても授業料をはじめ、文具、教材、作業着など全て政府が供与している。工芸科彫刻専攻では、木材を用いた彫刻表現を通して、造形技術の習得と能力を高め、将来のマリの造形美術の文化を担い、発展させる人材育成を行う重要な役割を果たし、クラフトセンター(Maison des Artisans)活性化の牽引役として、役割が期待されている。

### 4. 彫刻制作

筆者は、工芸科彫刻専攻に在籍し自ら造形美術の教育を受け、制作実習の結果、以下のような木彫作品を制作した(写真 2)。彫刻専攻の実習の学びから、制作工程について述べる。

#### 4.1 鉋

制作の際に特に注目したいのが、鉋(写真 3)という道具である。鉋は、鉄の刃がついたフランス語で Herminette と呼ばれる大工道具の一つである。日本では荒仕事専用とされる場合が多いが、本来は、丸太から角材を削り出すような荒仕事から、細かい仕上げ仕事に至るまで、あらゆる場面に使われる。

鉋は、柔らかい素材から硬い素材まで対応でき、全身像の彫刻では、顔部のような細部まで削り彫ることができる。顔面の目鼻口といった細部には、ノミや彫刻刀も使用するが、多くの場合は鉋のみで彫り上げる。

大工道具の中でも使い方が他とは異なり、刃を自分の方に向けて打ちおろす。鉋は、削るというより、はつる、つまり素材の表面を薄く削りとったり、はぐといたりした感じの使い方をする。そうした使い方に応じて、道具自体も頑丈にできている。少々の衝撃では壊れないよう、金属部の刃は、厚く、重く、反り返っている。最初の切口は刃で切るが、その先は少しずつ木目に沿って割はがすように使う。始めのうちはやや厚めにはつってもよいが、仕上げ段階では薄く長くはつるのがよい。そのようにするため、切り込みはつりに移る瞬間の刃の面は、薄く削りはぐ面と平行になっていなければならない。木製の台の上に木を置き、左手で木を支え、右手で柄の中央部よりやや後ろ寄りを持って振り下ろす。鉋の刃が木材に当たった瞬間に止めるように使う。その他、彫刻制作には、チョーク、ノミ、木槌、木工用ボンド、木材用ヤスリ、紙ヤスリ、蜜蝋、両刃ノコギリ、固定用万力といった道具類を用いる。

#### 4.2 木彫の保護剤

木彫の制作工程として、木肌をヤスリで磨き上げた後、保護剤で表面をよりなめらかに整える。これは彫刻の良さをより強調させるためであると同時に、乾湿から木を守るためでもある。木彫の保護剤として、植物性の蜜蝋やカリテ(Beurre de karite)を使用するが、多くは靴墨か、野外彫刻においては、車用ペンキで塗装をする。

#### 4.3 学習指導内容

4年間の学習内容として、最初に1年次は、彫刻表現の造形的基礎力を身に付ける。造形技法の実習を通して、木彫の基本的な立方体や直方体、球といった幾何学形態の工法を、そして素材に関わる道具類の知識や工法を学ぶ。続いて2年次は、人体や動物を題材に実習で表現を研究する。木彫の実習を通して、自然の中から造形の法則を学び、的確な表現技術、造形に対する感性を磨く。さらに3年次は、彫刻表現の方向性を探る。木彫における強調や動勢、意図に応じた単純化や省略といった彫刻表現を身に付けるため、人体の目鼻口などの細部と動勢を生かし、素材や表現の面で工夫を行う。最後に4年次は、より高度な彫刻表現の考察を深める。3年間で体得した造形感覚や技術、知識を踏まえ、高度な彫刻表現に向けて考察を深める。個人の思いを巡らし考えを練り、自ら課題を設定し自由制作を行う。自由制作では、4年間の学習、制作の集大成を目指す。

教員や生徒は、前もって用意したアイデアスケッチをほとんど使わず、想像した形をそのまま木材に刻んでいく(写真4)。彫刻の形態は、素材自体の形に基づき決まることが多く、彫る人の抱くイメージを大切に刻み込まれるようである。生徒による木彫作品は、人体や動物の目鼻口といった細部は最

小限に抑えた表現であった(写真 5)。

彫刻作品は、現地の人の手によりマリ人のために制作される仮面 (Masque), 彫像 (Jiri mogoni), 椅子(Sigilan)といった「モノ」と、旅行者向けの「トゥーリスト・アート」にかかわる技術指導が行われていた。

## 5. むすび

本稿の目的は、西アフリカのマリ共和国に焦点をあて、国立芸術高等専門学校の彫刻制作の実践例から、アフリカ仏語圏諸国の美術教育の内容と特徴を具体的な事例として検討することである。

I.N.A の工芸科彫刻専攻での造形美術の教育は、19 世紀以降の近代西欧による芸術教育システムによるものである。学習指導内容により制作工程が画一化され、彫刻専攻の生徒は、一般教養科目で幾何学を学ぶなど、体系的な学習指導が行われている。1 年次では、彫刻表現の造形的基礎力を身に付ける。実習を通して、木彫の基本的な立方体や直方体、球といった幾何学形態の工法など、立体としての「モノ」の見方や形態の表現技術を、そして素材に関わる道具類の知識や工法を学ぶ。彫刻の表現技法に関しては、日本での小、中、高等学校さらに、大学の学校教育教員養成課程と比較しても I.N.A は、より基本的な基礎力を養う段階から教育が行われている。これらは、近代西欧による芸術教育システムの影響を受けた一例である。

I.N.A で制作されている彫刻作品は、人々の間で受け継がれている造形を意識したものではあるが、いわゆる信仰にまつわる器物や像、宗教的な儀礼のための特別なものではない(写真 6)。伝統的なモチーフを組み合わせ、構成に工夫を凝らした形態の彫刻となっている。意外にも、観光地や空港へ行けば売られている民芸品は、近代西欧による美術教育を受けた職人により制作された土産物であり、I.N.A が「トゥーリスト・アート」を作る技術的基盤になっていると考えられる。

以上のように、マリの美術教育の特徴は、作品の制作工程が画一化され、体系的な学習指導が行われていた。つまり I.N.A における芸術教育は、旅行者向けの「トゥーリスト・アート」が出来上がるまでの一つの事例と捉えられる。

今後は、I.N.A の卒業生が、更に高度な知識・技能を身に付けるため、2004 年創立の芸術高等教育機関(Le Conservatoire des Arts et Métiers Multimédia Balla Fasséké Kouyaté)に進学し、修了後は中学校・高等学校の必修化された美術科の教員や芸術家など、専門的職業人として活躍する、今日マリの新たな状況をたどることを課題としたい。



写真1 筆者のI.N.Aでの制作実践の様子



写真2 筆者のI.N.Aでの木彫作品



写真3 鉞



写真4 I.N.Aの生徒による彫像制作の様子



写真5 I.N.Aの生徒による彫像制作の様子



写真6 I.N.Aの教員による椅子制作の様子